

「心豊かにいきいきと学び合う子どもの育成」

I. 研究の内容と方法

1. 内容の概要

一昨年度から、3年間のスパンで算数の授業改善を目指した研究を進めてきた。初年次は、児童の実態把握と学力の分析を行い、研究の視点を整理した。二年次は、算数科での「学ぶ力」の育成を目指した研究に取り組み、「考えを高める学び」「表現する活動の工夫」を研究内容として、「考えの言語化」に焦点を当てて取り組んだ。

研究のまとめにあたる本年度は、昨年度までの成果を生かしながら、「考え方の違い」と「表現の違い」に関わる指導と評価、考えや表現を交流させるためのコミュニケーションのあり方、子どもたちの関心・意欲（意識）をどのようにして高めていくかという3つの課題に焦点を当てて研究を進めた。

2. 研究仮説

算数科において、一人一人の考えを高める学びの中で、表現する活動を工夫することによって、自ら学びをつくり出す力が育成できるだろう。

3. 授業づくり

全体での授業研究は、算数で2本の研究授業と英語活動で1本の研修授業を行う。その他、部会ごとに全学級で授業実践公開をする。

| | | | | |
|-------|----|-------|----|---------------------|
| 授業研究Ⅰ | 4年 | 若月敬二郎 | 教諭 | 分数「分けた大きさの表し方を考えよう」 |
| 授業研究Ⅱ | 1年 | 金子佐由美 | 教諭 | 足し算「くり上がりのあるたしざん」 |
| 授業提案 | 6年 | 青柳俊雄 | 教諭 | 英語活動「有名な食べ物や味を伝える」 |

II. 研究の成果と課題

1. 「考え方の違い」と「表現の違い」に関わる指導と評価について

子どもたちの表現が豊かに表出されるためには、どの子の考え方も受容的に受け止める教師の姿勢が大切である。子どもたちの様々な考えを効果的に交流するために、子どもたちの表現したものを、まず教師が読み取り、提示方法や発表の順序を工夫して全体に投げかけるようにした。もちろん、子どもたちには、「考え方の違い」と「表現の違い」を理解させようというのではなく、あくまで教師の側で子どもたちの考えを整理して授業を構成する視点として生かすということである。

例えば、授業Ⅰ（4年生「分数」）では、マグネットシートに答えを書かせ、それを整理して黒板に貼り直して子どもたちに提示し、それらをもとに考えを練り上げていくという授業展開を試みた。その結果、効果的に学習交流がなされ、確かな理解へとつながることが検証された。

2. 「答えを問う」から「根拠を問う」へと発問の転換をすることについて

本時の授業を、「授業以前 - 本時 - 次時」という流れの中でとらえ、子どもたちがそれまでに身に付けてきている知識理解は何かということと次時につながる原理原則は何かということをも明らかにして授業づくりをした。授業では根拠を考えさせることを大切にして、「なぜ」を問いかける発問をつくってきた。

根拠を考える経験を積み重ねることによって、子どもたちが論理的に思考力を働かせようとするようになった。また、一つの課題に対して、多様な考え方があることが分かるようになり、様々な考え方を認めようとする雰囲気は学級の中に育ち、学習意欲の向上につながった。

指導の面では、子どもたちが課題解決に行き着くまでの思考過程を、表現されたものを見ることで読み取ることができるようになった。一人一人の考えの良さばかりでなく、つまずきがある時も、どこに問題があるかを容易に見つけ出すことができた。個に応じた指導が適切にできるため学習内容の定着がより図れるようになった。

3. 考えや表現を交流させるコミュニケーションのあり方について

コミュニケーションは気持ちを伴うものであるから、一人一人が自信をもって表現し、発表することが大切である。そのスタートは対教師との安定した関係であると考え、最初は、教師が聞き手としての役割を果たすことを重視した。そして、順次子ども同士の二人組や四人組へと広げていく。人数と学習の質が比例するというとらえではなく、学級の実態や本時の課題などを鑑みて、適正な人数や形態を考えるようにする。このような小集団学習は、全員が自分の考えを出せる場として効果があった。

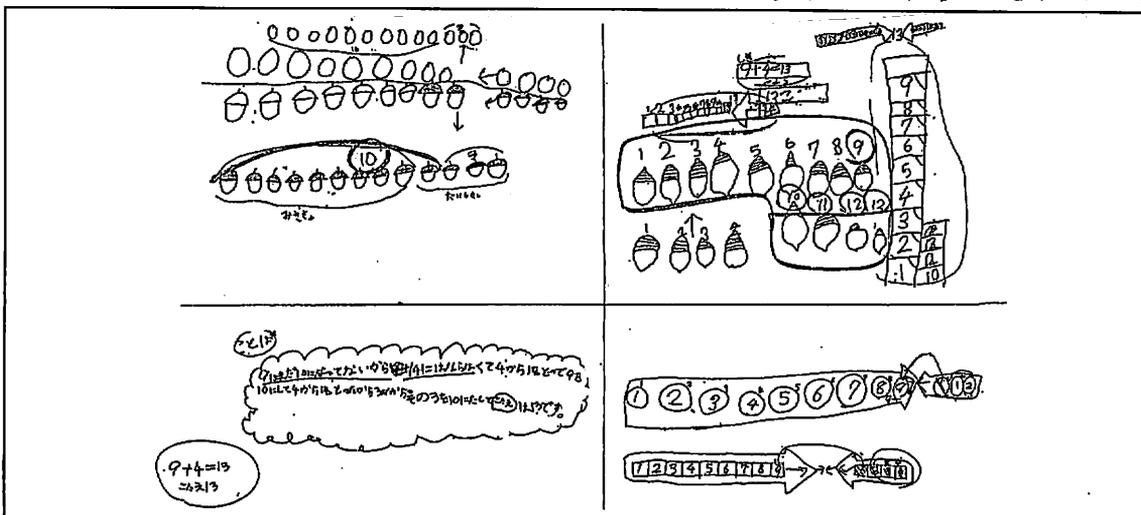
しかし、小集団の学習交流では、互いに言い合うだけで終わってしまうことも見られた。そこで、学びを高めるためには、日頃から学習集団の雰囲気づくりを進めると共に、学習交流時の教師が見通しをもって順序性などに配慮することにより、「分かち合う場」を作り出すことが大切であるとわかった。

4. 子どもたちの関心・意欲（意識）について

既習事項やそれまでに得た経験などを自分で引き出し、活用させることで、課題の自力解決に取り組ませた。自力解決できたという感覚は、子どもにとって喜びであり、自信につながった。そこに、関心・意欲の高まりが生まれた。自力解決にあたっては、それを支援する様々な手だて【絵や図に表すこと】【具体的操作、体験的な活動】【学習ノートづくり】【ヒントカード】【学習履歴の掲示】【個に応じた指導・TT】などを取り入れた。

Ⅲ. 成課物

▲ 1年生のノートから・・・「 $9+4=13$ 」の自力解決例。様々な表現がされている。



(研究主任 岩森真由美)